View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

brought to you by CORE

provided by Kobe Shoin Women's University Repository KARASHI-DANE

Kobe Shoin Women's University Repository

Title	外国語教育における文化元素の導入について―初級レベルの中国語学習者を中心に― On the Introduction of Cultural Factors in Foreign Language Teaching-Taking the primary-level Chinese learners as the main study subject-
Author(s)	張慧芬（ZHANG Huifen）
Citation	神戸松蔭女子学院大学研究紀要言語科学研究所篇 Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin , No.16：117-123
Issue Date	2013
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

外国語教育における文化元素の導入について
—初級レベルの中国語学習者を中心に—

張 慧芬
北京外国語大学
zhanghuifen8888[at]yahoo.com.cn

On the Introduction of Cultural Factors in Foreign Language Teaching
—Taking the primary-level Chinese learners as the main study subject—

ZHANG Huifen
Beijing Foreign Studies University

Abstract

本稿では、初級レベルの中国語学習者を中心に、外国語教育における文化元素の導入について論じる。従来、言葉は孤立しているものではなく、それは所属されている民族文化の土壌に根を下ろしていると指摘されている。本稿では、第二言語習得としての中国語教育に文化元素を応用することにより、学習者の異文化コミュニケーション能力養成を論じる。

This paper discusses the introduction of cultural factors in foreign language teaching, taking the primary-level Chinese learners as the main study subject. It has been argued for a long time that the language isn't isolated and is rooted in its ethnic culture. This paper focuses on how to apply cultural factors to the teaching of Chinese as a second language, and aims to improve intercultural communication competence of students.

キーワード: 中国語教育　文化元素　異文化コミュニケーション能力養成
Key Words: Chinese Teaching; Cultural Factors; Intercultural Communication Competence

1. はじめに

第二言語習得としての中国語教育は、本質から言えば言語の教育であり、その最も基本的な任務は、学習者の言語コミュニケーション能力を養成することである。それでは、中国語教育の基礎段階では、はたして文化問題に触れないでよいのだろうか。そうではないということは言うまでもない。というのは、いかなる言語教育でも目的言語の文化背景を避けて通れないからである。

アメリカの言語学者 萨丕尔（Edward Sapir）は、「言語の背景には目に見えないものがあり、しかも言語は文化と切っても切れない存在である。いわゆる文化とは、社会に伝わった習慣や信仰の総合体である」と述べている。つまり、言語は文化の一部で、文化は言語を内包する大きな体系である。他の言語を学習するということは、他の文化を学習することである。したがって、第二言語習得としての中国語教育における文化元素に注目し、文化元素の導入により、学習者の異文化コミュニケーション能力を養成することができるのではないかと思われる。本稿では初級レベルの中国語学習者を中心に、中国語教育における文化元素の導入について考えてみようとするものである。

2. 中国語教育における文化元素に対する注目

文化には異なる段階があるという。外層にある物質文化であれ、深層にある精神文化であれ、いずれも言語に現れているのではないかと思われる。言語は孤立しているのではなく、それは所属されている民族文化の土壌に根を下している。言語に表れる思惟方式こそ、一種の特殊な文化であるといわれている。世界に存在されている異なる民族と言語には、言語ごとに違った文化を持っていると言えよう。文化と言語との関係は、あたかも砂糖が水に溶けたように、その跡を探しようがないが、切っても切れない関係ではないかと思われる。言語は文化の一部分であり、言語は文化を伝えるものである。言語と文化は共生するものであり、互いに依存しあうものであろう。

ある意味で言えば、言語は一種の自然現象であり、文化現象でもある。言語の伝承は文化の伝承であり、言語は社会文化と文明の伝承でもある。そういう言語をマスターするためには、その言語を生み出し、使用されているその特定な文化背景を知らなければならない。言語教育と言語習得はその目的言語にわたる文化背景、文化内容に及ばなければならない。これらの特別な文化元素はまさに中国語教育の注目すべきポイントであると言えよう。

文化元素の差異は異なる比較によって表れるものである。こういった文化元素は言語体系に隠れているので、本民族の人はそれに慣れて当たり前になるが、第二言語習得の学習者にとっては、理解しがたいものであろう。したがって、中国語の習得は中国文化を離れてはならない。これは、まさに中国語教育において、文化元素に注目すべき重要な原因であろう。

中国文化元素に注目するには、まず、中国文化の土台となるものを知ることが教師に要求される。中国文化はおよそ次の四つの面からなっているのではないかと思われる。

1. 宗法文化（儒教、道家、仏教）
2. 農業文化（農業を主とする経済形態による文化制度）
3. 血縁文化（封建社会における大家族では、血縁関係が大変重要なことであり、世代関係や地位などの身分差別が特に強調されている。）
4. 四書五経（四書とは『大学』『中庸』『論語』『孟子』、五経とは『易経』『書経』『詩経』『春秋』『礼記』のことである。）

中国文化の土台となるこれらの文化元素は日常のコミュニケーション活動に浸透されて、言語表現によく表れている。例えば“多一个朋友，多一条路”「友人が一人多ければ、道が一本多い」という言い方が昔から伝わってきた。つまり「友達は道」ということを信じているようである。親戚や友人や知人が網の目のように広がって、個人と世界を繋いでいる。昔から友達や友人を大事にしてきた。“以和为贵”（和をもって貴しとなす。）“和气生财”（おだやかで財産を増やす）などの言い方もあり、今でも“和谐社会”（調和がとれて、整っている社会）を求められている。これも中国の伝統的な文化と繋がっているのではないかと思われる。

3.　文化元素の導入による異文化コミュニケーション能力の養成

外国語習得の必要性がますます高まっている今日では、第二言語習得としての中国語を習う学習者も増えているようである。従来、言語教育では、言語形式を重視されているため、音声、語彙、文法という教育が主導的な位置になり、語彙や機械的な文型ドリルなどが繰り返される。教師も学習者の言語形式の使用の正しさや流暢さに拘り、学習者の総合的な言語運用能力の養成はおろそかにされやすいようである。

ところが、異なる文化背景の人はそれぞれの社会規範に従うはずだろう。コミュニケーション活動における言語表現の違いは文化の差異によるものではないかと思われる。それで、文化元素をおろそかにされると、とんでもない誤解を招いてしまうだろう。

例えば、中国語の“手纸”は「トイレットペーパー」という意味である。日本語の「手紙」と全く同じ書き方であるが、意味は全然違う。中国語では「手」の本義を用便の隠語であり、トイレに行くことを“解手”「手を解く」と言う。そのような用便の「手」のための「紙」だから、“手纸”即ちトイレットペーパーになるわけである。

したがって、第二言語習得の学習者にとって、言語技能をマスターするだけでなく、対象国の文化を知ることも大事なことであると言えよう。

第二言語習得としての中国語教育において、どのように文化元素を導入したらいいか？文化元素の導入により、どのように学習者の異文化コミュニケーション能力を養成するかについて、筆者は次のように考えてみる。

3.1　目的言語の感受能力養成

日本文化は中国文化の影響を受けて、似ているところが多い。そうかといって、異なる民族には異なる文化を持っている。したがって、第二言語習得としての中国語授業で

は、学習者の言語基礎の訓練をしっかりとしたうえで、意識的に目的言語の感受能力を養成することが大事ではないかと思われる。特に、中国人のこころと文化の表現である。即ち、中国人の思惟や文化知識や風俗習慣などであろう。教師としては、学習者に意識的に言葉に表れる文化を知ることへの導入、文化差異への敏感さを増やすように指導しなければならない。

3.2 語彙内部にある文化内包の発掘

中国語には文化に関わる意味を持つ多くの語彙がある。このような語彙を身につけ正しく使うには、学習者がそれらの文化的意味を正しく把握しなければならない。その他に、大量の中日同形語も、日本人学習者にとって障害となっている。日本人学習者はよく、中国語の語彙の文化的な含みがわからず、母語の文化的影響を受け、またそれらの語彙の使用法則が曖昧であるので、誤解を犯してしまう。したがって、語彙内部にある文化内包への発掘をしなければならない。

語彙は言語における最も基本的な成分であり、言語諸元素の中で文化との関わりが最も緊密であり、それは一民族の文化のあらわれであるとも言えよう。

中国を語るのに中華料理は外せない。“民以食为天”「民は食を以て天となす」というからである。よく料理を楽しむのはその国の文化に出会うことでもあるという。日本は島国だから、日本人は魚に対して特別な感情を持っている。海に囲まれて、漁業資源が大変豊富である。昔から日本人は魚を食としてきたので、魚と深い関係を結んでいるらしい。これも日本語の表現にはっきりと表れているようである。同じ魚でも、異なる地域により、言い方が違っているそうである。それに対して、中国では食材を使った表現が多い。例えば、

- 姜是老的辣 = かめの甲より年の功 (← 生姜は古いほうが辛い)
- 吃醋 = やきもちをやく (← お酢を飲む)
- 吃鸭蛋 = 0 点を取る (← あひるのたまごを食べる)
- 装蒜 = しらばくれる (← 「蒜」はにんにく)
- 炒鱿鱼 = 首にする (← 鱿鱼(イカ) を炒める)

それらの食材を使った表現から、なんとなく“民以食为天”という意味が分かるだろう。そこで、《料理で学ぶオイシイ中国語》(古川・福富 2005) というテキストをお薦めしたい。そのテキストは基本的な文法や語彙を兼ねているばかりでなく、オイシイアプローチをするために、料理の素材や調理法、道具名やメニューの読み方など実践に役立つ内容を多く盛り込んでいる。学習者に一番身近な食文化から中国語の習得に興味を持たせ、勉強意欲を湧かせるだろう。

3.3　知識文化伝授の重視

知識文化とは、民族の政治、経済、宗教、芸術、法律、歴史、地理などを指す文化知識のことであるという。知識文化は学習者の文化意識を育て、判断能力や異文化コミュニケーション能力を養成するためには、欠かせない役割を持っている。それで、目的言語の知識文化を紹介することが有意義なことであるといっても過言ではないだろう。例えば、中国人の進取の気性や、勤勉さ、創意工夫など、中国の文化と精神が今の国民総生産に表れている。学習者も目的言語の背後にあるものに興味を持って、言葉の旅を始めるだろう。中国とはどんな国？ 若者の間でよく話題になるのは、どんなこと等々……。そのため、異文化コミュニケーションという観点が重要になり、ここにいっそ注意を払うべきではないかと考えられる。

3.4　コミュニケーション文化紹介の重視

コミュニケーション文化とは、異なる文化背景の人がコミュニケーションする際に、正しく情報の伝達に影響する言語と非言語の文化情報である。コミュニケーション文化に含まれる内容が非常に広い。衣食住、社会のしきたりなどの行動原則などである。教師としては、知識文化の伝授に注意を払うだけでなく、コミュニケーション文化紹介もおろそかにしてはいけない。学習者に言語、非言語による情報を完全に受け入れるようにする。初級段階のテキストには、挨拶言葉、食事、礼儀作法などの内容が含まれている。その内容と結びつけて、適当に深さ、広さを広げたほうが望ましい。学習者の持つ異文化性に注目し、それと対照しながら、教室活動をすると、その能率もきっと上がるだろう。

4.　異文化能力養成における注意すべき問題

文化と言っても、その面がものすごく広いので、第二言語習得としての中国語授業では、次のような問題に注意する必要があるのではないかと思われる。

4.1　学習者の異文化に対する意識を高めること

文化が異なると、コミュニケーションの仕方も異なる。したがって、教育の面で学習者の異文化に対する意識を高めることが重要になり、中国の文化、伝統、風俗、礼儀、人の性格及び言語表現習慣は日本と較べると欧米の国ほど違わないが、しかし、詳しく見てみると、いろいろな違いがあることがわかる。例えば、数字を例にしてみると、日本人は奇数が好きなようで、中国人は偶数が好きだということがわかる。郵便番号でも、中国の場合は６桁であり、日本の場合は７桁である。昔、中国では、親戚や友達の結婚祝いのプレゼントに、よく“花瓶一对”(花瓶二つ)、“热水瓶一对”(魔法瓶二つ)、“绣花枕套一对”(刺繍の枕カバー二枚）を贈ったものである。今では“红包”(赤い色紙で包んだ金一封）が一般的になった。いわゆる“成双成对”、つまり対になるものが好まれるようである。ところが、日本では偶数なら割り切れるので、タブーなことで、奇数が好まれるそうだ。

4.2 実用性に注意すること

教師によって教え授ける文化知識は学習者の学んでいる言語内容や日常のコミュニケーション活動と密接に関わらなければならない。教科書の内容をもとに、学習者の言語レベルや理解能力及び学習者の発展需要にしたがい、教えている言語内容を踏まえて、文化知識を教え授ける。盲目的に注ぎ込むことを予防すべきである。

4.3 適度さに注意すること

第二言語習得における中国語学習の初級段階は、中国語基礎知識を学習する重要な段階にあるので、教育の重点は言語教育にあるのではないかと思われる。したがって、文化導入をするには、その適度さを考えるべきである。性急すぎてもいけないし、主客転倒してもいけない。もし、内容が深く、難しくなったら、学習者の精力を分散するおそれがある。しかも、貴重な時間をとってしまって、ひいては期待と裏腹の結果になり、学習者の基礎言語学習に影響することになるだろう。

4.4 段階を踏んで進めること

一国の文化知識は、何回か何十回の授業にわたって学習者に身に付けてもらえることは不可能なことである。ゆえに、教師としては、まず学習者が目下、学習の妨げになるものを取り除いた後、今後の学習につながるニーズを考える。必要なところに触れ、浅いものから深いものへと、易しい内容から難しい内容へと進むことである。根気よく続け、段階を踏んで一歩一歩進めるように文化導入活動を行うことが大事ではないかと思われる。

5. おわりに

以上初級レベルの中国語学習者を中心に、外国語教育における文化元素の導入について述べた。よく文化は源であり、言語はその積み重ねであるといわれている。外国語と文化の習得は同じように重要であり、両者は密接に繋がっているといえよう。第二言語習得としての中国語教育に文化元素を応用することにより、学習者の異文化コミュニケーション能力養成につながることが可能であろう。

文献

ビアリストク, エレン・ハクタ, ケンジ. 重野純訳（2000）『外国語はなぜなかなか身につかないか』新曜社.

古川 典代・福冨 奈津子（2005）『料理で学ぶオイシイ中国語』朝日出版社.

罗 常培（1989）《语言与文化》北京语文出版社.

岡崎 敏雄・岡崎 眸（1990）『日本語教育におけるコミュニカテイブ・アプローチ』凡人社.

オックスフォード, レベッカ L., 穴戸 通庸，伴 紀子訳（1994）『言語学習ストラテジー』凡人社.

萨丕尔，爱德华 (1988)《语言学》，陆 卓元译,《西方语言学名著选 读》，中国人民大学出版社. [Chinese translation of Sapir, E. (1921) *Language: An Introduction to the Study of Speech*. Harcourt, Brace.]

袁 振国（2007）《教育新理念（修订版）》教育科学出版社.

张 国 扬，朱 亚夫（1996）《外语教育语言学》广西教育出版社.

Author's web site: `http://www.shoin.ac.jp/`

（受付日: 2013.1.10）